## 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	曾國潘と俗文學
Sub Title	Tsêng Kuo-fan and popular literature
Author	佐藤, 一郎(Sato, Ichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1957
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.7, (1957. 12) ,p.106- 116
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00070001-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## لح 俗 文

序

彼の文學的業績の意義に限定したいとおもう。なお、この廣範圍での相關關係については、「藝文研究」第六號において、すでに少しく を擴大して政治の分野に眼を轉ずれば、毀譽褒貶相半ばするといわなければならないのかも知れないが、 こそは桐城派中興の祖であり、中國の古文の傳統の最後を飾る名手として、その令名があまりに高いからである。 ここに掲げた曾國藩(一八一一一七二)と俗文學という題は、或は奇矯を好むかの如き印象を世人にあたえるかも知れない。 問題整理の都合上、ここでは もちろん少しく範圍 曾國藩 -106

觸れておいたつもりである。

の精神が强い。)、俗文學に對する抱擁力を顯著に備えていたことは事實である。それに曾氏の影響下に林舒・兪樾のような人々が輩出義理中心の載道)、俗文學に對する抱擁力を顯著に備えていたことは事實である。それに曾氏の影響下に林舒・兪樾のような人々が輩出 少しく丁寧に具體例に當つてみたらどのような結果が生ずるであろうか。 しているのだし、 いう問題である。 今、ここで改めて論じたいのは、 近代文學前史の運動の性格にも、彼のこのような態度が影響していないとは云いきれない。 桐城派の始祖である姚鼐とか方苞などの人々が純粹に古文のみを信じていた態度をおもいおこす時 桐城派古文の再度の隆盛を保證した曾國藩は、 それほど實際には、彼の俗文學は大きな比重は占めていない いつたいどの程度まで俗文學を許容していたのかと 古文家と規定する前に、 ( は派と呼べば、

佐

藤

郞

=

虚心に讀めば面白くないこともない作品を指す。(鄭振鐸に、「中國俗文學史」と題する名著がある。) 俗文學なる言葉を對置した。 歌謠の類を想定してみても、そう遠くはない。 あろうが、 う。まず第一に、士大丈の文學に對して庶民の文學としての、 俗文學とは、いつたい何を指してそう呼ぶのか。 (乱に手を染める者も多い。) 士大夫の文學という詩文中心の傳統的文學に對して、士大夫の文學に入らないものを考えることができよ ) また正統派ではないが現在の文學的規準に照した場合、より濃厚な血緣關係の認められる小說 要するに教養ある支配階級の眼からすれば、正面きつて論ずるに値いしない、その實 甚だ漠然とした言葉ではあるが、當時の文學の擔手だつた士大夫の文學に對して、 文語體を中心とする文學に對して口語體の文學であるとの定義が可能

する。 まで一日も休みなし。とある。 ) 咸豐八年六月から易簀の日に至る)、 を公表はしない。それは士大夫たる者の教養の範圍をはみだしており、その階級の倫理觀にはずれていると見なされるからである。 **陞つた人々にはこの傾向が目立つ。** ささかこの範圍を超えているし、 從つて古文の傳統の上に立つ正統派の士大夫階級は、 曾國藩も基本的には同じ系統を辿つた人であるが、 發表を意圖しなかつた日記が、 そして甚だしい場合には、 詳細かつ尨大な日記に(日~同治十一年二月三日に至る間は斷續あるも、ほぼ完全。「年譜」にも詳細かつ尨大な日記に(道光二十六年~咸豐七年の十二年間は缺けているが、道光二十一年正月元 外への發表を意圖することなく、よくその俗文學に關しての反應をも記錄しているのは注目に値 これほど完全に残つている例は、 自己の古文の精神を貫きつつそれを俗文學の實作で應用しているという點では、 普通、 俗文學に反應を示すことを好まない。 全然關心がないかである。たとえ讀んでいるにしたところで、その事實 清代の目星しい人物のなかでは、 特に志を得て政府の高官の地位に まず稀有の事實である

そこで曾國藩と俗文學という主題を追求する上に、

實作の外に「日記」とこれも十二巻にのぼる「家書家訓」があり、どのような書

ば、彼の文學觀のいわば裏側にあたる俗文學の面から、 きほぐして行きたい。 物をどういう動機で讀んだか、 | 曾國藩の俗文學についての見解のほぼすべてを盡したと信ずる、次に擧げる數々の例を丹念に組合せて行くなら いちいち具體的に知ることが出來て興味深いものがある。 ついには表側の文學における未知なる性格の一端をも明かにすることができる これらの資料を追いながら、 徐々に問題を解

Ξ

かもしれない。では、いよいよ本論に入ることにしよう。

だが、 の作・五百六十字。 南康水營での作、 曾國藩は太平天國戰爭の間に、 第一莫逃走・第二要齊心・第三操武藝・から成り、いずれも一句七字で三百三十六字の長さがある。 同じ形で四百六十二字。 解散歌は咸豐十一年安徽祁門大營での作、四百七十六字。ここでは最初の、 俗謠形式の歌を七首つくつている。 陸軍得勝歌は咸豐六年江西南昌省城での作、千三十六字。愛民歌は咸豐八年江西建昌大營で 即ち保守平安歌三首は、咸豐二年湖南湘郷の本籍でつくつたもの 第一莫逃走を例に引こう。 水師得勝歌は咸豐五年江西

別處紛紛多擾動 走盡九州并四海 我走天下一大半 若嫌此地不安靜 我境僻處萬山中やままたやまの ふるさとの 別處更難逃性命 此處卻是桃源洞 惟有此處最自在 惟有此處可避亂 四方大路皆不通 衆人謠言雖滿口

我境切莫亂逃走

只怕爾們太膽小

一聞謠言便慌了

108

一人當事不害怕 任憑謠言風浪起 我境大家要保全 其餘各縣逃走人 茶陵道州遭士匪 受盡辛苦破盡財 走出門來無屋住 衣服総然帶著走 壯丁縱然逃得脫 本郷本土總不離 一家安穏不喫驚いっかはやすらかさわがずに **祗因謠言自驚慌** 夜無被鋪牀板凳 文契縦然帶著走なきのけたとえもちだすも 男子縦然逃得脱 一人倉忙四山洮

婦女難免受煎熬

老幼難免哭號咷

大家喫碗安樂飯 立定主意不改移 我們穩坐釣魚船 十家太平不躱兵 百人心中有柄欄

(省略なし)

多因謠言嗾断魂 其實賊匪幷未來 切記不可聽謠言 惹起土匪吵一場 日無鍋甑切菜刀ないない **躱在山中北風號** 皆因驚慌先走徙 豬牛難帶一根毛 錢財不能帶分毫

ものの考え方と技術の上で、 る部分は經世致用の觀念におおわれている奏稿及び編纂ものであることに注意されたい。 量であり、しかもそのほとんどすべてが人の依賴をうけて後につくつた、實用に供するための文であり、彼の著作の最も尨大な量を占 はさらに後程、改めて考えてみることにしよう。 曾國藩の表藝である古文をよくみると文集は三卷、詩集も同樣に三卷の極めて少ない る信念と通ずるものがある。 これはおよそ藝術のための藝術とは、正反對の立場に立つ歌謠である。 人生的な觀照の深さを誇る文學とも異質である。 だから古文と通ずるのは特に信條においてで、歌謠のもつ文學的意義がもしあるとすれば、それについて 一般の文學の世界とは絕緣しているが、實際の役に立つということを眼目にしている點では、 古文におけ はじめから

そこからこの俗謠における教育効果の尊重が導きだされる。讀者または歌い手あるいは聞き手の共感を得ることが第一の目的になる。

庶民に理解される範圍にまで擴大した時、

自然にこのような宣傳的な形式におもいあた

つたのではなかろうか。

そして教育宣傳の對象を一般士大夫階級から、

賊に陷るの境に流布して、 難民の賊中に困む者に其の苦衷を曲達す。 士民之を讀みて、感泣せざる莫し。此に因りて自ら拔け

國藩の弟子である黎庶昌の編集した「曾文正公年譜」の辛酉・咸豊十一年一月の項に、次の記事がある。「……是の月、公解散歌一首

て來歸する者頗る多し。」

ここではあらわれているのだ。 これは解散歌について述べてはいるが、保守平安歌の場合にも事情はほぼ同樣であると考えられる。事實彼の意圖したような効果が、

戰守を講求するは之に次ぐ。得勝歌中の各條を得て、一一皆宜く詳求すべし。」

(國荃) にあてた手紙では、「帶勇の法は、

人才を體察するを以て、第一と爲す。營規を整頓し、

また咸豐七年十二月十四日の沅浦九弟

がすべてに優先しており、形式は傳達すべき對象がひろい階層にわたるところから必要に迫られて選擇されたとしかおもわれない。 重視していることがわかる。 對象は文字に親しまない階層ばかりではない。 必要な事項はすべて盛りこんで、規範として相手に認めさせようとしている。 内容を正しく傳達すること 有識階級である自分の弟にこう書いているのだから、非常にここに歌いこんだ内容は

の說あり。 九家七古六家は、 繰返し子弟に聲調の重要性をさとしている。例えば咸豐八年八月二十日には、「凡そ作詩は最も聲調を講究すべし。 序に「遂に水師得勝歌を製し、士卒をして歌誦せしめ、口相習いて以て熟し、其の大略に嫻わしめんと冀がう。」とあるがごとく、歌わ せることを目的にしたものである。 を第一の莫逃走にとれば、 では、この新しい對象に臨むに彼はどれだけの用意があつたか。 まず俗耳に入りやすき要素として極めて、 Ħ 書を讀むは訓詁を以て本と爲す、詩文を作るは聲調を以て本と爲す。……」 聲調皆極めて鏗鏘にして、人の百讀に耐えて厭れず。」 また咸豐十一年二月二十四日には、「余が日記の册中に又八本 口・走。 彼が作詩にあたつて聲調を奪んだことは、ひろく世に知られており、その家訓のなかでも、 中・通。半・亂。海・在。靜・命。小・了。逃・嗷というようにいずれも韻を踏み、 (紙にも同様の句あり) (同年三月初四日の手 口調がよろしい。 余選鈔する所の五古 水師得勝歌 繰返し 再び例

してみると、 ここにもごく屈折した形で、 彼の文學の理想の一端があらわれているわけでその詩論の本質には歌う詩・咏ずる詩への

さらにまた形式の上で敷え歌の形を水師得勝歌および陸軍得勝歌でとつていることは、やはり俗耳に入りやすい効果をねらつたもの

指向を元來有していたのである

ち上祖父以來相承つ家風を接ぎ、 興する目的で農事主獎勵しているのである。同年八月二十二日には、「家中養魚・養猪・種竹・種蔬の四事は皆忽せにす可らず。一は則 政の要なる者、 えば咸豐八年七月二十一日には、「家中蔬を種るの一事は、千萬怠忽する可らず。屋門首塘の養魚も亦一種の生機有り。 祿大夫會府君墓志)という家に成人した國藩は、 わずかに晩年秀才の資格を得ただけの中農の出身である。「吾曾氏、家世~微薄、明より以來、家業を以て名を發する者なし」(誥封光 心辨などの句は であるが、ここで咏じている内容を檢討してみると、下情にはかなりの程度通じていたことが分る。 下首臺上の新竹、 地方の農民の生活に相當通じていなければ出てくるものではない。 ここで國藩の家柄を考えてみる必要がある。 但此の四事の上に在りて用いるは、總て是れ妨げなし。」(あり同十年閏三月二十九日の記事参照)日此の四事の上に在りて用いるは、總て是れ妨げなし。」(咸豐九年四月二十三日にも同趣旨の文) 二は則ち其の外一種の生氣あるを望む。 枯れる者有りや否や」などはそれで、別に經濟的な必要を感じない身分に至つても、 戰場からでさえ農耕の實際上の注意を家にある澄季の兩弟にしばしば與えている。 其の庭に登りて一種の旺氣有り。 豬牛難帶一根毛とか、 幾個の錢を多く花い、 猪を養うも亦內 家の氣風を作 地方公事齊

の工を多く請うと雖も、

限界はある

境は彼等と理解を絕するほど遠く離れていたわけではない。 それぞれの歌の下に字數を示しておいたが、 が國藩は、 | 威豐二年から咸豐十一年にわたつて作られている。 そして、いずれもこのような形式をとるべき必然性のあつた太平天國戰爭の とくに太平天國戰爭の時期を通して下情に通ずる機會を多くもつた。 永い京官時代には途絕えていたとはいえ、 量的にもかなり大がかりなも

後さらに調査の機會を得ることを願つている あることを御教示いただいた。 では、 この俗謠はどのような流れを汲んでいるのだろうか、これについては 奥野信太郎先生から童謠という俗謠の流れを汲むもので 吉川幸次郎先生の指摘される、 太平天國側の同系の歌謠については、またそれとの關聯については、今

最中の作である

## 四

起す、 が考えられようが、 またあの謙譲な人が 多く見るにいたるのは興味ある現象である。これにはどのような理由があるのであろうか。曾國藩の肩にかかる政治的責任が重くなり、 はりこの戰爭中に高まつていることが分る。 その日記にあらわれたところでは、小說を讀んだ記事は年少氣鋭の頃にはほとんどなく、 いきれる自信を備えて以後、そして健康の衰えが目立ち心身の疲勞がきわめて激しくなつてから以後のことといつてよい。 わずかに道光二十三年二月十八日 (三十三歳)に「岱雲來館し久しく談ず、夜家に在りて小說を看る。」とあり、同年同月の二十日に「晏 前章で曾國藩の歌謠は、すべて太平天國戰爭中に作られていることを述べたが、俗文學全體にわたる關心の在り方を見て行くと、 飯後小説を看る。」の二例があるだけで、あとは太平天國戰爭も半ばを過ぎ、彼が四十九の齡を重ねてから、 まず第一に消閑の書を讀むことも新たに彼の慰めになつてきたのではあるまいか。 「余古文の一道に於ける、十分の已に六ノ七を得たり。 而して智を竭し力を畢す能わず。」(求闕齋日記類鈔)とい 精神の緊張をほぐし、 にわかにその事例を 色々の理由

間世界に遊ぶのは、

まんざら悪いものでもなかつた。

著になつてきたことと相應する。 ここに至つて曾氏には道學者の面影は薄くなり、思想に柔軟性が增し、抱擁力が大きくなる。 の幅がひろがり、 積極的な理由としては、 また古文に對する態度にも最初の頃の單純な載道說から相當程度文の價値をも認めようとする傾向が中年に至つて 京官時代には唐鑑(鏡海)の影響下に程床の學を専ら信奉していたが、軍務に就くにおよんで申韓にまで理解

以て光日を消せり。」(に加えておく。)とか、咸豊十年十一月三十日の「梅堂と鬯談最も久し。梅堂時事日に非なるに因りて、の場合は交際上の必要からも觀ている。)卽ち 咸豐九年六月二十四日には、「日中眼蒙くなれるに因りて、一字を敬作せず、呉の場合は交際上の必要からも觀ている。)卽ち 咸豐九年六月二十四日には、「日中眼蒙くなれるに因りて、一字を敬作せず、呉 であろう。 紅樓夢を閱看し以て排遺に資せりと。 のような場合すら生ずるに至るのである。 公の筆記を閱す。 いために、その鬱屈したおもいを慰める試みとして小説の類を手にとつていることが、つぶさに語られている。 このおもいが昻じたの まず新たに慰めとなつた小説の類について。(また芝居も見るようになるが、この事實も同樣の傾向のあらわれでもある。 同治十年正月初一日には永年の元日の讀書初めの習慣を破り、「中飯後、閱微草堂筆記を閱すること良久しくして、眼蒙し。」 核對甚だ心神を費やす。小說儒林外史を閱して以て悶を散ぜり。」とか同治九年五月三十日の「紀公の筆記を閱す。……又紀 傍夕紀澤と一談す、夜紀公の筆記を閱せり。」ことに二番目と最後の例とでは、戰局や政治情勢がおもうように動かな ……而して目下天津の洋務十分に棘手、焦灼に勝えず。故に僅かに筆記小説を閱すのみ。而して此の心、實に未だ片刻 余も亦之を閱すること下半日。」とか、同治七年閨四月二十一日の「曾阮等六家の詩と樂府詩集と 世說を関し しかし芝居 憤悶異常

二卷を閱せり。」同じ月の初七日の「夜古文三首を溫ね倦むこと甚し、水滸二卷を閱せり。」(外、水滸、關係三例) 飯後又小說十餘葉を閱せり。」外十一例の紅樓夢についての記事が續き、 氣分轉換や慰みごとのこともあれば、或る時期には同治五年五月二十五日の「早飯後、 うように長編の、それもリアリズム文學系統の代表作を一通り讀んでいるようだ。そして同治四年十二月初一日の「棋二局を圍み、水滸 を行なつているが、三カ月をへだてた十一月二十四日には「於に叉小說十葉を閱せり。」と、またも小說に親しむにいたつた意志力の不 では、どんな種類の小說を讀んでいるだろうか。まず本格的な小說では、「紅樓夢」あたりからはじまり、「水滸傳」「儒林外史」 同じ年の八月二十日になつて「小説は眼を遮る已。」との反省 文件を清理し、於に紅樓夢三卷を看る。…… というような單なる

足を嘆く言葉があらわれている。

えることができるが、晩年に至つて紀昀(文達)の関微草堂筆記を愛することことに著しさを加えている。 たその翌日の二十三日の「小睡片刻、小說十餘葉を看る。……小睡片刻、又小說十餘葉を閱す。……夜小說數葉を閱せり。」外五例を數 日には、「早飯後文件を淸理し、一紙を習字し、棋二局を圍み、小說書を看ること、三刻許り。…… 又小說を閱して倦むこと甚し。」ま それからさらに一年半ばかりの後、同治七年閨四月二十一日(前出)からはじまる、儒林外史に熱中する時期がある。 翌日の二十二

いる。この三カ月足らずの間に外に十二例 草堂筆記等間の書も亦看る能わず、因つて洋床の上に在りて閉目小坐す。傍夕少しく睡る。」と云うように眼病に苦しみながら讀續けて 二月十八日の「又閱微草堂筆記を閱す。」外この前後の六例。同治十年正月初一日(古)及び三月二十六日の「余が目蒙殊に甚しく、閱微 を閱せり。」外この前後の五例。同治九年五月二十二日の「紀公の筆記を閱す。」及び五月三十日の記事 (前)外この前後の五例。

とを語つている。 まず實例をあげて行けば、同じく同治七年六月二十七日の「紀文達の筆記を関し倦むこと甚し。……又紀文達の筆記

即ち同治七年六月二十二日の「関徴草堂筆記」を觀るにはじまる多くの例は、ただ單なる等間の書 (同治十年三月二) に止まらないこ

買つて送ろうとさえしている。 る紀氏嘉言序では、次のように詳細に論じられ、且評價を加えられている。 無くんば、當即ちに此の間の一部を以て弟に寄すべし。紙板亦壞けれども、之を金陵市店の板に較れば、猶略勝れる耳。」と、わざわざ き有らば、弟も亦常常之を関す可し。」そして弟に讀むことを薦めているのである。さらに同年六月二十七日には、「長沙に閱徴草堂筆記 説であつたろう。しかしこの年の五月初十日、澄沈の雨弟にあてて次の手紙をだしている。 そしてこのなかには、関微草堂筆記につい ての評語をも含んでいるのである。「閱微草堂筆記は紀文達公の著す所に係わり、多く狐鬼及び因果報應の事を言えり。長沙如し買う可 を関す。」は、けだし曾國藩のこの筆記小説についての日記における最後の記述であり、また翌年の二月四日に世を去つた彼の最後の小 同年四月十五日の「閱微草堂筆記を閱す。」十六日の「閱微草堂筆記を閱す……夜又閱微草堂筆記を閱す。」十七日の「閱微草堂筆記 その熱心の程も知れようが、「多く狐鬼及び因果報應の事を言えり。」の句は、 紀氏嘉言序はまず人の性を賢愚に分ち、愚者を救う道を説 會文正公文集の卷一にあ

ずけて紀氏喜言と曰う」のである。 曾國藩はこの時期には、すでに純乎たる宋學者ではなく漢學に理解を持ち、 文學史家は勸善懲惡の弊をその缺陷として說き、「考獻徴文、搜神志怪、衆態畢ごとく具わ」る典雅澗達な文章を愛するのだが、曾氏は **崇む。亦佛氏の說を廢さず、愚民の入り易き者を取る。委曲剖晰し以て其の聽を聳だたしめ、** は靡し。著す所の閱微草堂筆記五種、考獻徵文、捜神志怪、衆態畢ごとく具わる。 佛教に對しても抱擁力を示した後、いよいよ本論に入り、「河間の紀文達公、博覽彊識、 改むる十に四ノ五。」に至つた。 としてか、佛教をいちがいに退けない。 度はこの書序を求めた宛平の徐春泉の態度でもあつた。 彼は「其の彌精にして以て世を警するに足る者を擇び、 その境地にかなり同情を示しながらも、捜神志怪も勸善懲惡、俗耳に入り易きものとして統一的に理解しようとする。 て浮屠の妄を爲す、後世の事變人心これを言うに從えるものなれば、則ち浮屠警世の功は、吾が儒と略く同じからん。」というように、 以來、「聖哲と奸宄と、同じく氣數の中を流轉」するという有樣。 それにつけこんで佛者が輪廻因果の說をなしたために、「懼れて行を いて次第に儒佛の異同を及ぶ。もともと「愚者は罰を懼れて罪寡し、 しかし道は常ある者で、常者はすでに立つているのであるから、 彼の思想と表裏一體をなしている古文の範圍から、次第に俗文學にまで理解の幅がひろげられ 故に餘慶餘殃を稱え易き」ところなのに秦が力で天下を征服して 其の大旨は勸善懲惡に歸し、 百家の書、 海以內、 わが儒の言は敵われはしない。「而し 其の原を辨まえ、 幾家に一編を置けり。」即ち世 別錄すること一帙、名 中國聖人流傳の至論を また晩淸の學者の先驅 其の歸を竟さざる またそうした熊

## 五結

て行くのも不思議なことではない。

は勿論古文(今は觸れない。藝文研究第6卷參照は勿論古文(この古文自體も變化しているのだが) の風潮ではあつたが、曾國藩は世に尺牘體と呼ばれるこの形の文章の名手でもあつた。 古文の範圍から次第に俗文學にまで理解の幅がひろがつたというだけでは、まだ正確ではないだろう。 )を書くが、 日常の用を便ずるにはかなり口語化した文章が使われている。これは當時 家書、 家訓および日記の一部はそれである。 あらたまつて筆を執る場合に

とは、 此の格紙を用う。 別にそれだからいいといつているのではなく、そのために彼は幸であるか不幸であるかは知らない。 の唾餘、 の弟にあてた長文の手紙 展を遂げていたのではなかつたろうか。小倉山房尺牘に洪錫豫という人が序を書いて云つている。「隨園先生嘗て謂えらく、 生活に關係の深い部分は、 ざる者あり、 に抑制の効いた實用文である。 に引用した文にもそのため、 さすがに違つていた。 今の人或は尺牘を以て古文の悞と爲す也。」(悞は誤。)しかし曾國藩は袁枚のように、 然れども亦書簡の正宗に非ず。 未だ古文の書牘何者をか最善とするやを知らず」とも「古文の中、惟書牘の一門のみ竟に佳なる者鮮なし。 細述するによく、 弟宜く存留し、 (して弟に與えること三千字。) では、はやくもこの書簡の意味を重視し、(同日の「日記」に云う、信を寫) では、はやくもこの書簡の意味を重視し、 すでに清代には韓退之の書牘の形式は守れなくなつていたのではなかつたろうか。 漢文の書下し體としてはやや安定の惡い俗語が雑つている。 彼は何一つするのにも、たとえ人が唾餘と呼ぶような小技に從うのにもやはり眞劍にならざるをえない。 以て裝訂に便ならしむべし。」と、云つている程である。一貫した精進の態度が、 そして彼はひそかなる自負を、この種の文章に抱いていた。「類纂選する所の書牘、 内容本位である。 毎年裝訂して册を成すべし。 此の外は則ち竟に采る可きなし。」(求闕齋日記類鈔)とも云つている。書簡というような日常の やたらに難かしい故事や熟語がでてくることなく、といつて俗に流れもせずに、 其の中の好處は萬~忽略に看過す可らず。 この種の文の特徴は、總體に平易でのびのび 「隨に作り、隨に棄る。」 「嗣後、 道光二十二年九月十八日附の四人 諸弟が信を寫して我に寄する 我が諸弟に寫すの信は、總て そして、 盡くは吾が心を厭さ 徐々に獨自の (同序)の 八家中韓公差 尺牘者古文

ただ單なる桐城派古文の中興の祖という位置づけでは不十分であると考えるものである。 の程度口語を採り入れた尺牘體の名手であつたこと。 述を試みたつもりであるが、 以上具體例を追つて曾國藩の俗文學における實作、 同時にまた太平天國戰爭による實地の偉大なる教育があり、 結論的にいえば、 古文家としてすでにかなり新しい事態に卽應する體制を確立しつつあつたこと。 讀書範圍を說き、さらにやや古文の側の狀況をもその思想的背景に觸れ そこに折衷性と抱擁力が生れ、 曾國藩の文學は濃厚に過渡期の性格を示しているのであつて、 俗文學を必要に應じて認めるだけの彈力性が出來 (會の發表草稿に、手を加えたものである。(この一文は、「日本中國學會」第九囘全國大

亦須く一色の格紙を用い、

よく何われよう